

## 教育のイメージ① ～運動会の練習において“本物の力”の育む1つの例～

平成26年10月 理事長 片山喜章

今年、建て替え移管をした大阪府寝屋川市のこども園で、保護者の方と立ち話をしました。

「運動会を2～3週間先に控えているのに、広い園庭で全く練習していない、ほんとうに運動会をするのですか、とても不安です。他の保護者もそう言って心配しています」という声をいただきました。練習は室内でしている事と具体的な練習内容と子どもの姿と園の理念をお伝えすると納得されました。運動会の練習と言えば、残暑のなかで保育者も子どもたちも必死にがんばっている姿をイメージし、その姿が「成長を促す」と全国的に理解されているようです。

確かにその姿は「我慢する体験」です。しかし「自分はこうしたい！」と子ども自身が目標をもったうえで我慢するのと、強いられて我慢するのでは、教育効果が真逆になることもあります。練習に集中し、力発揮するために、子どもたちは快適な遊戯室で練習しています。

4歳児のパラバルーンは保育者が演じた作品をビデオで見て学習し、その後、自分たちだけで演じます。保育者は無言でも、子どもどうして「ああだろう、こうだろう」「それはちがう」と声をかけ合って演じます。さらに子どもたちが演じている姿をビデオに収め、演技終了後、それを見て振り返りをします。やはり「ああだ、こうだ」と言いますが、最初は自画自賛で「自分たちはスゴイ」と甘い評価をするのが子どもらしいと感じました。ウロ覚えの子は、自発的に周囲の子どもの動きを見て、真似ようと努めます。その姿勢が良い経験と言えます。といっても覚える力は大人の何倍も持っている子どもたちですから、さほど時間はかかりません。

何より教育的と言えるのは、練習中、あるいは練習後、保育者から「ああしろ、こうしろ」と訓示めいた指導を受けることなく、子どもどうして評価し合う点にあります。演技に対する自己評価が、保育者目線ではなく仲間目線で語り合う経験（子どもの姿）がとても有意義です。

この「こども園」ではじめて取り組む5歳児の組体操も「3人組などの仲間集め」と「ピラミッドなどの形作り」を子ども任せにしています（本番もその予定）。練習の出来映えをビデオに撮って再生することで「仲間外れ」になっている子どもを発見したり「自分は上だ、下だ」とモメている自分の姿を振り返ることもできます。何かを感じたり、何かに気づいたり……。そして「ああだ、こうだ」と話し合いが生まれます。くり返すほどに話し合いの質が高まる事を期待する、それが教育目標であり、具体的な保育方法であり、法人の理念です。

日本社会全体がこれまで抱き続けてきた教育のイメージと異なるだけに、すぐには理解していただけないかもしれません。落ち着きのない子が落ち着き、消極的な子が積極的になることは望ましいですが、端的に言えば、それが教育目標でも保育の成果でもないと考えます。

学童後期、思春期になれば、大きく変わる子もいれば、変わらない子もいます。けれども、「子どもどうしてかかわり合ってやりとげた経験」は、落ち着いた子どもにとっても、やんちゃな子どもにとっても「本物の力」として、その子の胸の内に宿り続けると信じています。